

子どもが病気になったとき

2005.03.30

春の訪れとともに、インフルエンザの波も収まりつつあるようです。今年は、B型の流行の後にA型が流行。それ以前には高熱が5日も続くアデノウイルス感染症も流行がありましたので、3回の辛い試練を乗り越えた子どもたちにも保護者にも記憶に残る秋から冬でした。

辛い試練は発熱ばかりではなく、嘔吐や下痢、発疹など、育っていくために罹ってしまう必然的なものです。ワクチンがないものは、まさにその典型です。子どもにとってこれらの病気に薬を飲ませることは、あくまでも辛さを取り除いて自分の力で治っていくのを手助けしてあげているに過ぎません。適切な薬を選択するのはもちろん医者の仕事ですが、薬をだましながらも上手に飲ませたり、辛さが楽になるような看護をしたりは家庭でみている保護者の役割です。

最近、嘔吐と下痢が続いているというお子さんを連れてきたお母さん、診察が終わったとたんに泣き出していました。「どうしたんですか？」と尋ねたら、「子どもが辛そうで辛そうで、できれば私が変わってあげたいくらいだ」と。点滴が終わって、子どもの顔に赤みが出たころには、またいつものお母さんの顔に戻って「薬を頑張って飲ませます！」という気持ちが顔に出ていました。人の気持ちに寄り添えることができず、何かあれば人を批判することが多く殺伐とした雰囲気が漂う世の中ですが、こんな気持ちで子どもに接することができる人ってすばらしいと伝えました。

子どもが病気のとときに手間隙をかけて看護するのは、親にとっても辛いことです。でも、皆さんの記憶の中に、子どものころ病気で辛かったときにそばに寄り添ってくれた母の思い出はありませんか？そのときにきつとてつもない安心感があったのではと思います。子どもにとっての一番の薬がひょっとするとその安心感なのかもしれません。医者にとって薬を出すことは難しいことではありませんが、親からもらう安心感までは処方することはできません。